¡Hola amigos!

R と N の Málaga からの手紙

（０２３号）

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。　ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

２００３年１１月１４日　　Ｒ　＆　Ｎ

目次	更新日
身辺雑記	２００３年１１月１４日
食べある記	２００３年１１月１４日
買い物百般	２００３年１１月１４日
エクスカーション	２００３年１１月１４日
ビーノあれこれ	２００３年１１月１４日

ご注意　：　各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。

悪しからず。

＊身辺雑記＊

＊ ＊ ＊

♪　だれも、いない海・・・　♪

夏の間、人の多さと日中の日差しの強さのため、海岸への散歩は殆どしていませんでしたが、最近は又海へ下りて行く事が多くなりました。

夏中、人が溢れていた浜辺もすっかり様変わりで、たまに波うち際で犬の散歩をさせている老夫婦やジョギングをしている人に行き逢うぐらいの静かな海になりました。

こうなると、目が合えばお互いに軽く、オラ、と声も掛けるようになり、海岸の散歩が日常の生活のひとコマ、という感じが戻ってきました。人が少ないオフ・シーズンのリゾートはいいもんです。

寂しいと感じる人も多いでしょうが、私達にはこのセイセイした寂しさは貴重です。

夏の間は夜遅くまでハダカンボがうろうろ、ごろごろしていた浜もご覧の通り。

（鑑賞に堪え得ない）トップレスが占領していたビーチチェアーにも誰も寄り付く者はいません。マットも取り払われて事実上この商売は終り。後はいつ片付けるか人手待ちみたいです。この写真の場所、たったツイこの間まで人・人・人で埋まっていたんです。まだ、大勢の足跡がはっきり分かるでしょ？

こうなったらシめたもの、この広い浜辺は私達のような散歩人間のものです。

この店は一部のカサをはずして片付けが始まっている。デモ、ソレも途中でやりっぱなし。もう、どうでもいいわ、と言う感じ。

夏の間はワンワン言っていたチリンギート(海浜レストラン)もこの通り、営業はオシマイ。もうしばらくすると、回りのキャンバスも取り払われて冬支度。

二、三日前、浜を歩いていたら何か見慣れない事をしている人に会いました。

金属探知機を使って広い砂浜を探って歩いているんです。beachcombing ビーチコウミングです。

この言葉、あまりナジミはないかも知れませんが、一部の人には「趣味」として市民権を得ている言葉です。要するに浜辺を散歩しながら貝殻を拾ったり、遠く見知らぬ所から流れ着くものを拾って異郷の地に思いを馳せたり、根っこを磨いて美術品に仕上げたり、という多様な楽しみです。たぶん白秋や啄木もやってたんですね。

しかし、英・和でこの言葉を引くと余りいい意味の訳はでていません。

「生活や趣味のため浜辺で漂流物などを拾う」はいいとして、「波止場ルンペンをして暮らす」なんて事も書いてあります。

くだんの金属探知オトコはどちらかというと後者に属す、と言っていいでしょう。

どうやらコイツは、夏の間に大勢の海水浴客が落としたであろうコインを探してるんですね。片手に潮干狩りの熊手を持ってビーっとなったら砂を掻き漁るんです。毎年秋になるとこんな事をやっているような、慣れた手つきです。

私達は「優雅」に、貝殻拾い。でも２ユーロ・コインが落ちてたら、ドーする。

拾うナァ、ヤッパリ。＊＊＊

（私達の beachcombing の獲物）

＊＊＊

来週（２１日）の更新はお休みとさせて頂きます。カナリー行きです。では・・・。

＊＊＊

＊食べある記＊（及びタパス・デ・ラ・カサ）

＊＊＊

「サメダンゴ」ノ巻　２００３年１１月１４日　更新

サメダンゴ。日本語です。エッ、そんな日本語知らないって？　イヤ、知っている筈です。「鮫・団子」。ホラ、知ってるでしょう。でも、殆どのかたは、なに言ってんだ、と思うでしょうねー。日本では限られた地方以外、鮫をあんまり常食しませんから。特に都会育ちの人にはなじみの薄い食べものだと思います。

しかし、知る人ぞ知る。長崎なんかではごく普通の食材として扱われている筈です。Ｒの記憶では、(あまり高級ではない)料亭で、鮫の煮凍りが出たこともありますし、もっと頻繁に出入りした小料理屋では、当たり前のように色々な形で出ていました。例えば湯がいた物を酢味噌でとか、すり身団子を揚げて甘酢あんかけにしたり。全然抵抗なんか感じませんでしたよ。重い食べものではありません。

鮫なら何でもいいか？　というと、ソコはソレ、やはりウマイ、不味いは常に付きまとう問題で、Ｒの知る限りではツノザメのたぐい、トチザメのたぐい、オナガザメなどが一般にうまいとされている筈です。魚の名前は標準和名で言っても通じない地方が沢山あり、逆に、ある地方でごく普通に呼び慣らされた魚名が魚類図鑑ではどうしても見つからない事もあります。ですから、ここではあえて魚名は特定しないでおきましょう。何でも食べてやろうという好奇心のある方、または単に食い意地旺盛の方は、自力で調べるか、または試食なさってください。

乗船中は、沖待ち(入港待機のため港の沖で錨拍したり漂泊したりする事)の時など良く釣り糸を垂れましたが、鮫がかかると、その種類によってはフィリピノ・クルーは大喜びでサバいていました。どうやら、鮫は、北方民族より南方民族に好まれる食材のようです。ソレは鮫が暖流系の魚で暖かい所の方が種類も個体数も断然多いからだと思います。日本でも一般的に鮫を食べるのは九州地方ではないでしょうか。Ｒは北海道・東北でソレと知って食べた記憶がありません。北の出身の方、如何でしょう？

（cazon adobo カソン・アドーボ）

さて、今日の一品。カソン・アドーボ。カソンは鮫。アドーボはマリネー、またはその漬け込み液のこと。つくり方は、私達の想像ですが、多分、マリネー液で味付けした鮫のすり身団子を揚げたもので、そんなに複雑なことはしていない筈。サックリと軽い味で、まずまず。セルベサにはもってこいでしょう。一皿１．５ユーロ。うまくなくても腹は立たない値段です。

食べた所はマタマタ例の闘牛の店、「前の酒蔵」です。この店、具合の悪い事に、又は都合のいい事に、駅から医療保険の代理店へゆく最短ルートにあるんです。

それにしてもこの一品、揚げ物なのにフリート frito と言ってません。この店のタパスはもう殆ど試して、残った素性の知れないものがコレだったんです。

最近は横着になってあまり辞書を持ち歩く事をしなくなったので、素性がわからないまま注文したんです。まあ、食えないものを出す筈はないんだから・・・。

向こうからカマレロが運んでくるのをみて一瞬、肉団子かなと思いいました。

でも、アルボンディガスとは何処にも書いてなかったし、何だろう。持ってきたカマレロにコレなに？と聞きました。彼、チョッと言いよどんだ風でしたが、手をひらひらさせて、ペスカド(pescado さかな）と答えました。なあんだフィッシュ・ボールか。フムフム、チョッと酸味があって油のしつこさもないし、まあまあじゃないのと思ってました。

正体が分かったのはウチへ帰って辞書を引いてからです。

cazon ツノザメ、メジロザメ、トラザメとなっています。ホーラ、やっぱりツノザメはうまいんだ。でもカマレロは手をひらひらさせながら正体をはっきり言おうかどうしようか迷ってたんですね。まあ、ペスカド・魚といえば無難かなと・・・。＊＊＊

＊＊＊

＊買い物百般＊

＊＊

「英西・西英辞典」ノ巻　２００３年１１月１４日　更新

辞書さえあればどうにかなる、というものではありませんが、辞書は外国語の勉強には欠かせぬもので、心強い味方であることは確かでしょう。

私達はこの年令としては「異常」と言えるぐらい辞書を引く回数が多いと思います。ソレは母国語が通じない所で生活するものとして当たり前でしょうが、元々Ｒは外国人クルーと長年付き合っていたので、辞書を手にしない日はないと言っていいぐらいでした。今もその延長線上にいるわけです。

乗船する時の荷物で一番重いのは書籍類で、なるべく少なくしたいのは山々ですが、ビデオが簡単に見れるようになる前は、航海中の唯一の友は本でしたから一冊でも多く持っていたい。一回こっきりで読み切ってしまうものでなく、何回も何回も見直して何度でも楽しめるもの、その都度新しい発見があるもの、Ｒの場合それは辞書と図鑑と地図。だから初めて電子辞書なるものが発売された時は、嬉しかったですね。以来電子辞書だけでも、いったい何個買ったでしょうか。

そういう生活を４０年続けてきて、今また、同じような環境にいます。

今や、ＲとＮはずっと一緒なので、Ｎも同じく、主婦としてはやはり「異常」な位、辞書を手にする機会が多くなっていて、私達はまるで辞書に囲まれているようです。只今現在の数はスペイン語関係が７冊、リーダーズ英和・和英・英英・漢字・広辞苑が入った電子辞書、ジーニアス英和・和英・漢字・カタカナ語・類語・広辞苑が入った電子辞書、プログレシブ英和辞典一冊と言う陣容です。英語関係のペーパー辞書はほかの本と一緒に全部親戚に預かってもらい、これ一冊だけもって来ました。

図鑑と地図は重いし場所も取るので、泣く泣く図書館に引き取ってもらったり、処分してしまったりで、殆ど手許にはありません。こういうものは、見たいと思ったときすぐ手の届くとこにないと、おおいにフラストレーションがたまります。

写真はコリンズというイギリスの辞書の電子版。製作はアメリカ、生産は中国。

私達はここへ来た当初はスーパーへ買物に行くのにも、厚い西和辞典を持って歩きました。ポケット版の辞書（と言っても実際はポケットに入りません）では、食材の品名など出ていないことが多いのです。しかしここの生活にも段々慣れてスレて来るともう厚手の辞書を持って歩くのが億劫になり、最近では辞書ナシで出歩く事が多くなりました。わかんなきゃ、聞きゃいいやと開き直ってしまったのです。でも、チョッと一言思い出せない単語があるとそこでグッとつまってしまうのです。しかも、このチョッと一つ思い出せない、という事が実に多くあるのでイヤになります。

だから、実際にポケットに入れることが可能で、一言でもいいからヒントを得られる簡単な辞書が欲しい、そう思ってました。こういうものが有ることも前から気づいていました。デモ、まあ、なけりゃないで済むものはなるべく持つまい、シンプル・ライフに徹しよう、それにコレでビノ何本買えるか？すぐソコに頭がいってしまうのでまっ、そのうちにナ、と思ってました。

そしたら、今年の誕生日に娘がプレゼントしてくれたんです。お父さんいま何を欲しがってる？とＮにこっそり聞いたんですね。

一番上が電子辞書、二番目はＲが２０年ぐらい前に買ったソノ種本。三番目から六番目はポケットに入らないポケット版と称する辞書、しかも殆どいざというときに役に立たない。下二冊は一番頼りになる本物の辞書、ただしコレでも決定的に語彙が足らない。この八点を較べるとそれぞれのボリュームの差は歴然です。

冒頭に辞書を引く回数が異常に多いといいましたが、別に私達がそれほど勉強好きというわけではありません。同じ単語を何回引いてもすぐ忘れてしまうので、又すぐ引きなおさなけりゃならないんです。だから、単に「回数」が多いだけ。

分からないなりに、段々スペイン語に慣れてきて感じるのは、英語と同じ部分が実に多いということです。そりゃ、当たり前と言えば当たり前ですね、スペイン・フランス・イタリー語等のロマンス語と同じラテン語を語源としている英単語は実に多いんですから。動詞の活用とか文法となるとかなり違ってきますが、綴りの一部が違うだけという単語は沢山有ります。イロハの日本語からスペイン語に置き換えるより、ＡＢＣの英語からスペイン語になおす方が簡単なのは当たり前でしょう。

いい例として、前置詞等は断然和西より英西のほうが手っ取り早く理解できます。

それで、この電子辞書の出番です。でもこの英西・西英電子辞書にも泣き所が一つ。

それは、英語がわかんなきゃ使い物にならんと言う事です。コレは別の難問。＊＊＊

＊＊＊

＊エクスカーション・既刊＊

＊＊

「続・アランブラ」の巻　２００３年１１月１４日　更新

＊＊＊王宮＊＊＊

さて、いよいよアランブラの極めつけ、王宮へ入ります。前にも言いましたがここは最も人が込み合うところで、入場制限をしています。

前号に地図を入れるのを忘れました。文中に出てくる場所に印をつけておきましたのでたどってみて下さい。ギザギザは徒歩で登った長い上り坂。ヌエバ広場からチケット売り場まで約３０分の道のりです。赤い線は城壁。

私達は王宮への入場を１１時半から１２時と指定されていたのでチケット売り場から箱根路のような糸杉の並木道を通って、先に夏の離宮・ヘネラリフェにゆきました。

その後、矢印の位置から城壁内に入り、パラドールの脇を通ってカルロス５世宮殿、王宮、アルカサバの順に回ったのです。

前号で言いましたが、王宮とアルカサバ(城址)以外は自由に出入りできます。このことは旅行案内書ではナゼカ触れていません。知らないのは私達だけだったのかナ？

王宮やアルカサバへ入らなくてもアランブラの雰囲気はそれなりに味わえます。

自由旅行をなさる方で、チケットの予約が出来ないとか、当日券も買えない時は諦め

ずに切符ナシでゆける所だけでも歩いてみることをお奨めします。

王宮内部の細かい装飾を施した華麗ともいえる様子と、外壁や屋根部分の無骨さは、かなりアンバランスな感じを受けます。当時は宮殿といっても半分は城砦として機能することが必須だったのでしょうね。

これからお見せするのは王宮 Palacios Nazaries パラシオス・ナサリエスと呼ばれる場所の写真で、どの観光案内にも必ず解説が出ていますし、この宮殿に関しては多くの書籍が出版されています。興味をお持ちでしたら図書館などで借りてゆっくりご覧ください。

では、余計な説明は抜きでしばし精緻なアラベスクをお楽しみください。ＰＣのディスプレイで直接ご覧の方は見る角度を少し変えながらご覧下さい。見る角度によって紋様が変化します。本当はもっと大きな画像でお見せしたいのですが、重くなりすぎるのでやむなく画質を落としました。後に出てくる小さい写真は天井と壁のおもしろい部分を切り取ったものですが、画質が落ちて迫力なくなってしまいました。

窓の外はアルバイシンからサクロモンテの丘の麓、外の景色と壁の内側の紋様を同時に良く見る事は出来ません、ディスプレイの角度を変えながら交互に見て下さい。

ライオンの中庭 Palacio de los Leones 猫みたいなライオンが水盤を支えている。

噴水が出ていないのが残念、水のない噴水はウツロ。

如何ですか？　天井と壁のアラベスクの数々。こんな建築、金勘定しながらではとても出来ませんヨネ。費用も手間も全く無視して出来上がったシロモノ。今から作ろうと思っても障害が多すぎる。だからこそ世界遺産なのでしょう。手間暇かけてという点では、スペイン各都市にあるカテードラルなどは皆そうだし、現在進行形はサグラダ・ファミリアですね。世界遺産の建造物の多くは宗教的なものですが、どの宗教でも力の誇示ということになると、費用の大きさなどブッ飛んじゃうんですね。「浄財」はいくらでも集まるわけ。洋の東西を問わず、ボーズ丸儲けの世界。

王宮の写真の最後に次の一枚。これは王宮の屋根の一部ですが、知らずに見ればこの下にアノ華麗なアラベスクが隠されているとはチョッと想像し難い位ショボイです。ほんとに同時進行で造ったの？と思いたくなるような無骨さ。

＊＊

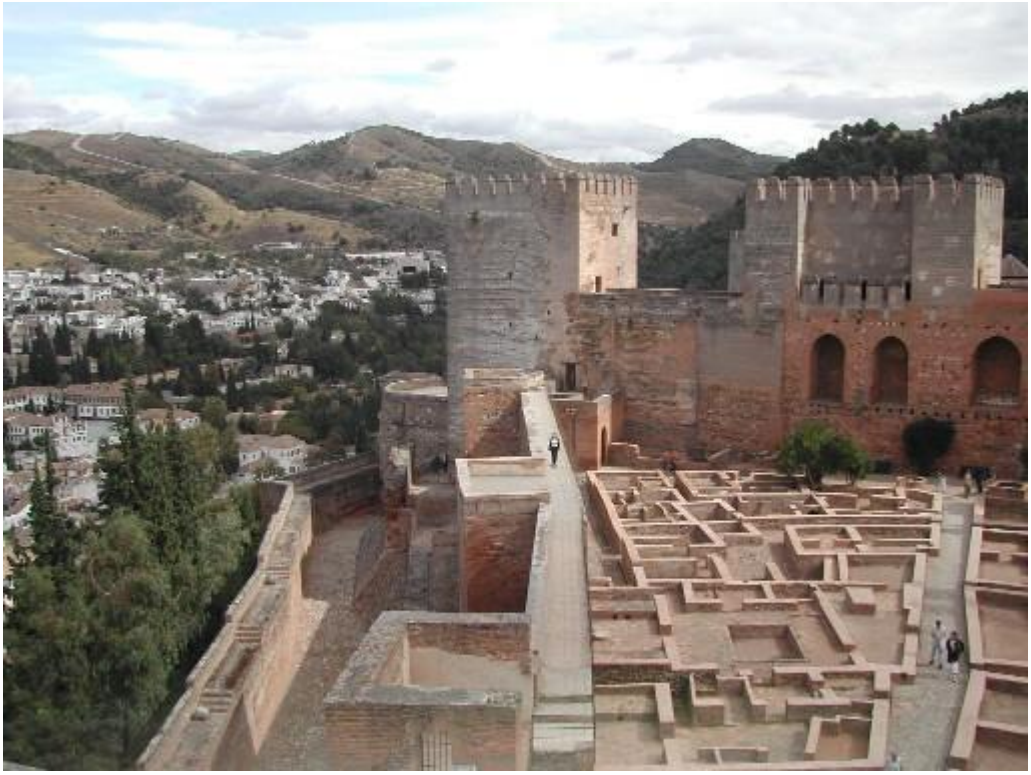
＊＊＊アルカサバ＊＊＊

続いて宮殿の西の端に位置するアルカサバ。これは純粋に戦闘に備えた城で、装飾は一切なし。ほんとに無骨一点張りです。しかしその分周囲の見晴らしは抜群です。肉眼での見張りだけが頼りだった頃の城では、欠く事の出来ない条件だったんですね。この日はテレビの天気予報は悪かったんですが、朝のうちは快晴で私達がグラナダにいる間中何とかもってくれました。お陰でアルカサバの屋上からの景観を心行くまで楽しむ事が出来ました。何処の観光でも同じですが上天気に恵まれるのとそうでないのとでは印象が全く違ってしまいます。

グラナダからの帰り、私達のバスがマラガの町に入った途端、雨が降り出して電車の駅へ歩く間に土砂降りになってしまいました。アランブラで降られなかったのは、ほんとにラッキーでした。来年一月には娘が留学中大変お世話になって、今もお付き合いが続いているイギリスの老婦人(例のトゥ・マッチ・デコレーション！の御婦人)と一緒にアランブラ再再訪の予定です。今度は雪のシエラ・ネバダが見える筈です。彼女にかかってはアランブラもトゥ・マッチ・デコレーションかな？

ワインの門近くから見たアルカサバの入り口。さすがに戦闘の場所という感じ。

上の写真の裏側、北側の城壁。重火器の無い頃では難攻不落だったんでしょうね。



北側城壁の内部。本来は兵舎でもあったんでしょうが、残っているのは基礎だけ。

最上部ベラの搭(Torre de la Vela)から南を見たところ。遠くに見えるのがまだ雪のないシエラ・ネバダ。落ち延びてゆくムーア最後の王が、峰を越える途中宮殿を振り返って涙したと伝えられる「嘆きの峠」Puerto del Suspiro del Moro がある。

最後は、同じくベラの搭から西方を見たグラナダ市街地、アルバイシンはこれより右手、北方になる。中央はカテードラル、その一部、左端部分は王室礼拝堂。外部はこの通りどちらかというと陰気くさい建物ですが、内部は、何度も言っているようにキンキラキンの過剰装飾。どうやら、グラナダをムーアの支配から取り戻し、ムーアが築いたアランブラに負けまいと向こうを張ったせいか、肩に力が入っちゃった感じ。町も綺麗とは言い難い。どうもグラナダという所にはつい反感めいたものを感じてしまうのです。多くの血が流された土地の怨念でもあるのかナ？？

実はこの日、例のヌンカ・マスのレスタウランテ・チーノに入る前、アルバイシン地区のハズレにあるチョッとイスラムっぽい装飾のついたレストランに入ったのです。入った瞬間、ン？という感じがしました。中にいる人間が全員ギロっという感じで私達を睨んだのです。向こうにしてみれば睨んだ、なんてとんでもない、と言うでしょうが、悪いけどそれほどキツイ目で見られたのです。それでもカマレロは一応にこやかに注文を取りに来ました。とりあえず、セルベサ。「ナイ！」。　エッ、じゃあビーノ・ティント。「それもナイ！」。ここまで来てやっと気が付きました。そうか、ここはイスラム教徒専門のレストランだったんだ。ソーか、ソーか、ゴメンナサイ、サヨナラ。この町では今でもイスラム世界が脈々と生き続けているんですネ。＊＊＊

＊＊＊

＊ＶＩＮＯ＊

＊＊

「真空ポンプ」の巻　２００３年１１月１４日　更新

コレが真空ポンプ(bomba de vacio ボンバ・デ・バシオ)です。フランスの製品で、日本でも何処かに、例えば「東急ハンズ」などに売っているかもしれません。

ご存知のかたもいらっしゃると思いますが、ワインを一本呑み「キラ」なかった場合、又は呑み「キレ」なかったとき、瓶の中に残った空気を抜き出してワインが酸化するのを防ごうという道具です。

いかにもフレンチの考えそうなことで、スペイン人はまずこんな発想はしないでしょう。ナンデ、呑んじまわネーんだ、とくること請け合いです。

コレは近所のスーパーで買ったものですが、スーパーでわざわざフランス製のこんな小道具を売っていることが、スペインじゃこんなもん作ってネーよ、というメッセージに思えるのは僻目でしょうか？　買うのは多分イギリス人等の外国人、ヘンなハポネスも。

実はもう一つ別のタイプも持っていたんですが、それもやっぱりフランス製でした。

ワイン産出国はフランスだけではないのに、消費の多い国も決してフランスだけでは

ないのに、コルク抜きやシール・カッターやソムリエ・ナイフなどの小道具はいろんな国のものがあるのに、なぜか真空ポンプはフランス製のしか知りません。

どなたかほかの国の同様な製品をご存知でしたら教えて下さいませんか？

ビノ周辺の変わった小道具としては、この真空ポンプの逆の発想、即ちポンプで空気を送り込んで内圧を高めてコルクを抜こうというもの。コルクを千切ってしまうなどの失敗が無く、綺麗に抜こうというものです。これはなぜかドイツ製でした。同じようにポンプを使うのに、フランスは空気抜き、ドイツは送り込みです。bomba という単語、ここではポンプの意味ですが、同時に英語の bomb 爆弾のことでもあります。

綴りから言ったってこっちのほうが近そうです。

だから最近のテレビではこの言葉をしょっちゅう耳にします。イラクでもパレスチナでも爆弾騒ぎが殆ど日常茶飯事みたいになってしまってますからね。

この単語はその他色々隠語的にも使われる事が多いようで、面白い所ではグラマラスな女性もボンバ・爆弾なんだそうです。キケンなんです。

一方、vacio は英語の vacuum ヴァキュームと同じで「真空・空白」という名詞でもあるし、「空の・内容のない」という形容詞でもあります。この単語も辞書には面白いウラ的使い方が出ています。例えば guapo pero vacio では「(アイツは)ハンサムだが頭は空っぽだ」なんだそうです。けなしの意味又は否定的な表現に使われる事が多いようです。反対に「空っぽだけどハンサムだ」という言い方があるかどうかは書いてありません。けなしの反対だからといってこれが「ホメ」になるかどうか？

そもそも、ナンデこんな道具を買ったかと言うと、二人で一本を飲み「キレ」ないときが、いつか来るかも知れない、と考えたんですね。残ったビノが酸っぱくなっちゃつまりません。白ならソノまんま冷蔵庫へ入れときゃいいにしても、赤は冷蔵庫なんかに入れたくない。コリャいいもんメッけた、と思いました。デモこれ、まだ一回も使ってないんですよね。いつも空けりゃ呑み「キレテ」しまいますから。＊＊＊

＊＊＊